カイのおもちゃ箱

辻 仁成

Hitonari Tsuji

カイのおもちゃ箱

辻 仁成

Hitonari Tsuji

本書は書き下ろし作品です。

カイのおもちゃ箱

一九九一年六月一〇日　第一刷発行

著者　辻仁成

装丁　大木裕

発行者　若菜正

発行所　株式会社集英社

〒101-50　東京都千代田区一ツ橋二-五-一〇

編集部（〇三）三二三〇-六一〇〇

電話　販売部（〇三）三二三〇-六三九三

製作課（〇三）三二三〇-六〇八〇

印刷所　中央精版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©1991 H. TSUJI, Printed in Japan　ISBN4-08-775147-3 C0093

想像してみなさい。天国なんかないんだってことを。……

ジョン・レノン

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

カイのおもちゃ箱

父と母に

序章

初め、暗闇が全てだった。果てしなく暗い空間が続くだけだった。そこには一条の光りさえなかった。無。……音も無かった。匂いもなかった。平らでもなく、凹んでいるわけでも出っぱっているわけでもなかった。点でも線でも、球でもなかった。閉ざされた容器の内側でもなければ、その外側でもなかった。時間でもなければ、次元でもなかった。捩れているわけでもなく、まっ直ぐなわけでもなかった。はじまりもなく、縁や果てがあるわけでもなかった。全体というわけでもなく、かといって一部分というわけでもなかった。

僕は、そこにいた。（いるという表現が、どれほど適切な言葉かはわからないが、存在する、という表現よりは適切な気がする。）

そことはどこか？……わからない。でも、誰かがいて、何かを今にも伝えようとしている気がした。ここで待っていればいいのかもしれない。その時僕はそう考えていた。

僕の瞳は閉じていた。まだ開く必要性はないような気がした。何かが始まるまで、待っていればいい。何かの順番を待っている。そんな感じがしたのだ。

最初に現われたのは、イメージだった。しかしそれは形ではなかった。デザインでもなかった。

生きるということのヴィジョンのように、曖昧模糊とした展望のようなものだった。一定のリズムを持った鼓動が響きはじめた。不快ではなかった。何かを呼び起こすような、そして目覚めさせるようなビートを持っていた。ずっと聞いていたいと思うような音の連続だった。正確にそれは一定だった。つまり、保たれている、ということ。それがその時の僕には、とても大切な気がしたのだ。保たれている、ということが。そのことをもっと考え、認識しなくてはならないと思った。

もしかしたら、それが僕の最初の思考かもしれない。飛び越えてはいけない。次には、そういうことを考えていた。僕はいつのまにか、意志を持つようになっていたのだ。それが、どこからやって来たのか、見当もつかない。思考や意志は、気がついたら、宿っていたのだ。

暗闇が僕に何かを伝えだしたのは、その頃だった。思考や意志が、僕をその暗闇に存在させはじめた頃のことだ。一つ一つのメッセージは、瞬間的でかつ膨大な情報を含んでいた。なんとその量の多かったことか。無意味だと感じるくらい、それは多かった。

そして、それは全てが理解を超えていた。意味を超越していた。まさに、流れだった。歴史という見方もできたと思う。絶え間ない連なりだった。僕は最初っから、それらを理解しようと必死になっていた。しかし、いくら努力しても、そのとぎれることのない流れを理解することは不可能だったのだ。

そして僕は、結局完全にあきらめ、ある時、それらを受けいれていくことにした。事は単純だった。理解するのではなく、受け入れるということだったのだ。膨大な情報は、そのほとんどが

教訓だった。教訓は選択を、選択は淘汰を促した。多くの情報がふるいにかけられ、細かい網目から洩れていった。ふるいの網目は更に細かく、より小さくなっていった。その選択はどんどん頂上を目差し、一つの確かな結論に導かれていた。

そして、淘汰は次の段階へ進むことになったのだ……

暗闇ははじめて僕に具体的な命題を提示してきたのである。

〝進化せよ……〟

必要にせまられてのことか、期限的な制約のせいか、何かの保持のためか、あるいは破壊のためか、僕にはわからない。しかし僕は、それに従うしかなかった。逆らうこともできたのだが、反抗とか反乱とか反逆とか、そういうレベルではなかったのだ。もう、そういう段階ではなかった。

〝受け入れる〟このことが、とても重要な意味を持っていた。

僕は、疑うことも、迷うこともなく、それらのことを全て実直に受け入れていった。それまでの価値や環境や基準がいかなるものであってもである。僕の中には、いつのまにか新しい秩序とおぼしき基準が芽生えはじめていた。

しかし、その新しい流れは、暗闇全体からすれば、見落としてしまいそうな一点だったかもしれない。鶏卵に滲む一筋の血のようなものだ。革命というのは、常に狂気を隠している。僕の中に滲んだ一筋の血の存在を、知るものは、神だけなのかもしれない。

1

生まれ落ちた子はまったく泣かない赤ん坊だった。そればかりか、まるで、自分がこの世に今、生まれ落ちたんだということを知っているかのような表情をしていた。そこには冷静さがすでにあった。信じられないことに、思慮深さがあった。驚いたことに一片の洞察力さえあるように思えた。静かに呼吸を繰り返しながらも、じっとあたりに聞き耳をたてているかのようだった。大袈裟に言えば、存在していることを確かめているようでもあったのだ。

まだ瞼(まぶた)は閉じていたが、意識や性格が顔のそこかしこに、はっきりとした表情として現われていた。

看護婦の一人は、誕生があまりにも静かだったため、死産ではないかと心配して覗き込んだほどだった。別の看護婦は、声帯か脳に障害があるのかもしれないと、注意深く見下ろしていた。担当の女医も今までの出産ケースとはどこか違うその雰囲気に事態を把握しようと必死だった。

泣かない赤ん坊は、うんともすんとも言わないばかりか、体を動かすこともなく、静かに横たわっていた。生きているのか、死んでいるのか疑わしいくらいに。……

医者も看護婦達も確かに慌てていた。微かに開いたり閉じたりする手の平の動きに、唯一、生の証(あか)しが見出せる以外は、まるで越冬しているカブト虫の幼虫のようだったからだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

健康な赤ん坊が生まれてまもなくあげる元気なうぶ声は、出産と同時にいままで活動していなかった肺に空気が入り、肺呼吸が始まり、血液循環の切りかえが行われることの証しでもある。心配した看護婦の一人が女医にそのことを耳打ちするが、女医は赤ん坊のバラ色の皮膚を指差し、首を左右に強く振る。酸素が十分に取り入れられていない生まれたばかりの赤ん坊は、紫色をしているのだが、この赤ん坊ときたら、信じられないほど鮮やかなバラ色をしていたからである。

更に彼らを驚愕させたのは、胎児と胎盤とをつないでいるはずのへその緒が、丁度その中間地点で切断されていたことであった。長さ約五十センチ、直径約二センチ、多くは螺旋状に左に捻転しているのが、通常の臍帯のかたちであるが、それが、ひきちぎられていたのだ。へその緒の中は、一本の静脈と二本の動脈が流れていて、胎盤を仲だちにして、母体の血液から栄養分を胎児に送り、一方胎児の体内で発生した不要物や炭酸ガスを母体に返す役目をもっている。へたに切断すれば出血過多で死ぬことさえ起こりうるのだ。

サルなどで、出産直後に臍帯を噛み切る例がまれにあるが、出血で死ぬということがないのは、動脈停止が人間よりも早いからであった。

胎内で噛み切ったのでしょうか。別の看護婦が女医に耳打ちする。しかし女医もそれにははっきりと答えを返すことができない。ただ呆然と、その切断されたと思われる臍帯を見つめるだけなのだ。

泣かない赤ん坊は、自らの意志で臍帯を噛み切り、生まれてきたというのか？　女医は心の中で自問していた。

赤ん坊はそんな女医たちの驚きをよそに、まるで地蔵のような悟りきった表情をうかべて、黙然としていた。目も鼻も口も耳も、まだ豆粒ほどに小さかったにもかかわらず、一つ一つははっきりしていて、たった今生まれたとは思えないほど整った輪郭の中に、すっぽりとおさまっていた。

担当の女医はたじろぎながらも、心配するほどの生死に関わる問題はないではないかと、自分に無理矢理言い聞かせて、出産の瞬間に立ちあうべく入室していた、赤ん坊の父親に向かって呼びかけた。

「男の子ですよ。」

分娩室の片隅で、祈るようにずっと待ち続けていた父親は、強張っていた表情を、瞬間強引にほころばせながら、一歩一歩近づき、恐怖に満ちた不安と神秘的な驚きと無上の喜びとの複雑な境界線をしっかりと踏み越えて、息子と対面した。

自分の遺伝子が関わったはじめての作品だった。賢そうなお坊っちゃん、看護婦の一人が、場の空気を変えようと、父親のすぐ隣りにすり寄ってそう囁いた。看護婦達の間に意識的な微笑みが湧き起こる。

確かに。父親は満足そうに数度うなずいてから、どっちに似たんだろう、僕だろうか、それとも妻か？　とてもハンサムじゃないか、と冗談ぽくつけたした。女医は、自分の危惧がとりこし苦労であることを祈りながら、御主人と奥さんのいい所を半分ずつ受け継いだのね、と励ました。父親は抱きかかえたい気持ちをぐっと堪えて、用心深く息子を覗き込んだ。自分の血を受け継い

だ息子だと思うと、瞼の裏側がいつのまにか熱く濡れていく。
かすむ視界の先で、泣かない赤ん坊が自分にだけは微笑みかけたような気がして、父親は胸が感動で張り裂けそうになっていくのを感じていた。
誰かが、よかった、と一言呟いた後の分娩室は、赤ん坊が生まれた瞬間と同じような沈黙に、再び包みこまれてしまった。

自分の居間の壁に住みついた小人達の世界を空想の中で創りあげたことがあり、自分は小人達の生命を支配し、彼らから王様のように崇められている、と精神科の医者に語った、マーク・デビッド・チャップマンが、ダコタハウスの正門前でジョン・レノンを射殺した日。
一九八〇年十二月八日に、泣かない赤ん坊サエキ・カイは生まれた。
冬将軍の偵察部隊が、東京にビバークしたその日、肌に突きささるナイフのような強い北風が、きびしい季節の到来を予感させていた。つき抜ける青い空、白く躍る太陽の光り、どこまでも長く伸びる人々の影。
路上を舞う無数の落葉、そして一日中、どこからともなく聞こえてくるジョン・レノンの歌声。
全ては、ゆっくりと物語りのはじまりを待っていた。

2

満員電車から吐き出されるとすぐ、両親ははぐれないようにとカイの手をそれぞれ強く握り締めた。右手を父親が、左手を母親が。カイはその真ん中で、ブランコのようにぶら下がっていた。ずるずると引きずるカイの二本の足に、コンクリートの感触が伝わってきていた。死体ごっこ、とカイは一人呟いた。

しかしカイのそのか細いジョークは、駅のノイズに掻き消され、背の高い両親の耳許には届かなかったようだ。閑静なベッドタウンから必死で出てきた両親にとって、巨大駅の狂気じみた混雑は、道もないアマゾンの危険な藪の中のようなものだった。二人はお互い、二言、三言、カイの頭の上で会話を交わし、歩を進めるばかりであった。プラットホームの上は、巡礼者の行列が続くメッカの路上のごとく、あふれんばかりの人々でひしめき、ごった返していた。無数の人生のレールが引き合って絡みあい、たった一日のうちに何十万人もの人々が通過し、時には物語りをひきちぎってしまう巨大駅。人によっては人生の始発駅でもあり、又終着駅でもあるその都市の強力な磁場の中を、カイをつれた両親は、人々の肉体を押しのけながら進んでいた。

改札口を目差していたこの純朴な親達も又、その瞬間、それることのできない人生の厳しいレールの軌道上にいたはずだ。そして二人は、巨大駅の出口の先に一縷の望みをかけていたのである。

「駅の出口は、新世界の入口なんだ。」

父親は息子の手を引っぱりながら、確認するように一人自分自身にそう言い聞かせる。彼はカイが生まれてからのこの十年間、あることをどうしても認めたくはなかったのだ。そして妻と、もう何度もそのことで言い合い、苦しみを抱えて今日まで生きてきたのである。

母親は、カイが三歳の春、この子は普通じゃないと言った。どこかが狂っている、とはっきり主張したのである。

普通じゃないと投石した母親の波紋は、二人の間に激しい葛藤を生み落とした。それまでわざとお互い見ずに、触れずにきた運命の異物に対して、その一言は不良品という烙印を押すようなものであったからだ。

二人の見解の相違は、その時から激しく対立していく。そんなはずはない、この子は少し変わっているだけだ。時間をかければ大丈夫さ、父親はそう言いはった。

しかしそんな父親でさえも心の中では、母親の考えを否定しきれないでいたのである。いやむしろ彼は、ぬぐいされない一点の黒い恐怖を抱えていた。そしてそれは、残酷にも時が証明していくことになる。

兆候は、生後まもないカイの身の上に、既に灰色の影を落としていたのだ。

カイは、(その誕生と同じように、)家のベビーベッドで暮らすようになってからも、泣くこともなく、又決して笑うこともなかった。

両親は必死であやしたり、イナイイナイバーをしたり、機嫌をとるようになだめたり、思いつ

く限りの方法で赤ん坊の感情に触れようと努力するのだが、異次元空間を見つめるようなその超越的な視線を捉えることはできなかった。

カイは誰とも目を合わせることをしなかった。ベビーベッドを覗き込むあらゆる訪問者（親類や近所の人々）に対して、彼は一様に関心を示さなかったのである。

そんな反応のなさに対して、両親は、一時、カイの耳は聞こえていないのではないかと考え、方々の耳鼻科に見せて回ったことがある。しかしどの病院でもその白黒をつけることはできずに、結局、隣室のテレビの音に対する微かな反応や、電話のベルへの反応等から、耳は聞こえているらしいと判断されたのだ。

赤ん坊は通常、声、特に母親の声に対してその方を見、その姿を目で追うという追視行動を必ず起こすが、カイの場合には、そのような反応もまったく見られなかった。

更に歩きはじめるようになると、ますます他の一般的な自閉症児と同じように、カイにもそれに属すると思われる様々な兆候が見うけられるようになってきた。不眠、睡眠の不規則、電気掃除機や乾燥機の音に対する不快反応。箱に入っているものを全てひっくり返し、中味をぶちまける破壊行動。カレンダーや自動車のナンバープレートに対する興味と、それらの驚異的な暗記力、列車の時刻表や、図鑑や地図、様々な標識・記号の配列、円グラフ、棒グラフ等、特定の対象へ向けられたかたよった関心、痛覚、皮膚感覚、味覚、嗅覚の異常等である。

それをあくまでも認めようとしない、あるいは認めたくはない父親と、それを一日でも早く認めて、対処していきたいとする母親との間で、揺れ動く育児への反目の日々は続くのだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com